

川合一郎著作集

第五卷

信用制度とインフレーション

有斐閣



川合一郎著作集 5 信用制度とインフレーション

昭和 56 年 11 月 15 日 初版第 1 刷印刷

昭和 56 年 11 月 25 日 初版第 1 刷発行

定価 4,800 円

著 者 か い い ち
 川 合 一 郎

発 行 者 え く た あ
 江 草 忠 つ

東京都千代田区神田神保町 2~17

発 行 所 株 有 斐 閣
 式 会 社

電 話 東 京 (264) 1 3 1 1 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷・株式会社三陽社 製本・株式会社高陽堂

© 1981, 川合和子. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-05325-1

刊行にあたって

川合一郎教授は、つねに基本的な理論に基礎をおき、同時に具体的な現実を鋭く見透しながら経済学の研究を進められてきた。川合教授の考え方を貫いているこの二つの方向は、著作、論稿のすべてを貫徹しているといつてよい。

この考え方は、一つには川合教授の基礎理論の重視、理論にたいする執拗な追究の態度に基礎があり、他方、現実にたいするダイナミックで鋭い感覚にもとづいている。川合教授は、この二つの態度を柔軟な思考によって結合されていた。昭和二十年代から五十年代にわたって、弛みなく続けられた著作活動には、この二つの方向が脈々と流れており、論稿はいつの場合も、十二分な清新さと明晰な分析力、また説得力をもっていた。川合教授の経済学は、借り物の議論、押し付けの理論ではなかった。そして、絶えず新しい問題意識が用意されていた。

現代の経済は、多くの重要な問題を含んでいる。世界経済は、ほとんど国を問わず共通な病理に悩んでいる。一九三〇年代の不況は生産のいちじるしい低下と大量の失業の危機であつたが、現在は失業も物価騰貴もというスタグフレーションの危機である。川合教授は、最近では金融論、証券市場論の分野において、根底にある一般的な理論の正否を問う鍵としてこの問題、また財政再建をめぐる金融、証券の領域に山積している諸問題の分析に眼を向けられていた。

本『著作集』全六巻は、川合教授の業績を総括し、川合教授の理論と分析、またこれらを生み出した思考と人柄の全体を広く伝えることを目的として編纂された。主著のみではなく、時期にしたがつてそれぞれ肉迫された課題にたいする透徹した分析は洩れなく収録して、川合教授の友人、門下生によって体系的に整理、配列した。読者は、改めて川合

教授の絶えざる創造的な見解に触れるとともに、複雑な経済社会を照射する基本的な視角を得られるであろう。とくに若い読者が、広い視野と新しい指針を得られることを期待している

一九八一年八月

川合一郎著作集編集委員会

玉野井昌夫

目次

1 信用制度とインフレーション

序

第一章 先進国のインフレーション

——豊富からのインフレーション——

一 はしがき

二 「新しいインフレーション」説

三 「新しいインフレーション」現象の基盤

四 むすび

第二章 後進国のインフレーション

——貧しさからのインフレーション——

一 はしがき

二 後進国インフレーションの地位

三 後進国インフレーションの原因

四 後進国インフレーションの発現形態の特質

三

九

九

二

五

一〇

二五

二五

二七

三一

四〇

五	むすび	四七
---	-----	----

三	章 独占価格とインフレーション	五〇
---	-----------------	----

一	はしがき	五〇
---	------	----

二	新しいインフレーションの構造的性格	五三
---	-------------------	----

三	独占価格とその波及の条件	五五
---	--------------	----

四	消費者物価の騰貴	六四
---	----------	----

五	むすび	六七
---	-----	----

四	章 信用とインフレーション	六九
---	---------------	----

一	はしがき	六九
---	------	----

二	通貨と資金	七〇
---	-------	----

三	預金の貸付と現金の貸付	七六
---	-------------	----

四	好況による物価騰貴とインフレーションによる物価騰貴	八六
---	---------------------------	----

五	むすび	九四
---	-----	----

五	章 消費者物価の騰貴とインフレーション	九六
---	---------------------	----

——コスト・プッシュとデマンド・プル——

一	はしがき	九六
---	------	----

二	消費者物価騰貴の運動過程	九七
---	--------------	----

三	消費者物価騰貴の分配構造.....	一〇四
四	価格形態の拡充としての消費者物価.....	一〇九
五	消費者物価の騰貴と本来のインフレーション.....	一一一
第五章補論	高須賀義博氏の所説について.....	一二七
一	物価騰貴と賃金.....	一二七
二	サービス部門の解明を.....	一二八
三	滞貨処理の側面.....	一二〇
四	物価押上げの二つの特徴.....	一二三
五	消費者物価騰貴の貨幣・金融的側面.....	一二四
六	むすび.....	一二五
第六章	いわゆる「マイルド・インフレーション」について.....	一二六
一	はしがき.....	一二六
二	古典的インフレーションと「マイルド・インフレーション」.....	一二九
三	金融資産と「マイルド・インフレーション」.....	一三四
四	むすび.....	一三五
第七章	不換銀行券の伸縮について.....	一二七

一 はしがき	一五
二 不換銀行券の伸縮	一六
三 貸付—回収による銀行券の還流	一六
四 預金による銀行券の収縮	一七
五 金融政策の根拠	一七
六 むすび	一八

第八章 オーバー・ローンにおける資金と通貨

一 はしがき	二二
二 戦後オーバー・ローンの歴史性	二三
——オーバー・ローンとインフレーション——	二三

三 オーバー・ローン論の変化	二六
四 成長通貨供給方式論の歴史性	二六
五 成長オーバー・ローンの構造	二六
六 むすび	二四

第九章 企業間信用膨脹の意義について

——商業信用と信用制度——	三〇
一 はしがき	三〇
二 企業間取引と商業信用	三二

三 商業信用の埋没	二二
-----------	----

四 商業信用と企業間信用の「復活」	二七
-------------------	----

第二〇章 証券流通と所要資金	三四
----------------	----

——公社債流通市場形成の条件——

一 はしがき	三四
--------	----

二 資金拘束論争検討の視角	三五
---------------	----

三 証券市場と流通資金	三六
-------------	----

四 流通資金からみたわが国証券市場	三四
-------------------	----

五 むすび	四〇
-------	----

第二章 管理通貨制下の株式恐慌と信用パニック	四三
------------------------	----

一 はしがき	四三
--------	----

二 需給要因と金融逼迫と救済政策の展開	四七
---------------------	----

三 株式救済と金融市場	五五
-------------	----

第二章 金融政策の論理と構造	六〇
----------------	----

一 はしがき	六〇
--------	----

二 金融政策の基盤	六一
-----------	----

三 金融政策の展開	六三
-----------	----

四 「新しい金融政策」論……………	二六七
五 むすび……………	二七四

2 転形期のインフレーション

世界のインフレと日本の物価……………	二七九
--------------------	-----

日本型インフレの特質……………	二八六
-----------------	-----

一 慢性的なインフレ体質……………	二八八
-------------------	-----

二 新しい物価騰貴の形態……………	二九三
-------------------	-----

三 コスト・インフレの問題……………	二九五
--------------------	-----

四 物価騰貴の二つの側面……………	二九八
-------------------	-----

3 開放体制下におけるインフレーション

日本のインフレと円問題……………	三〇三
------------------	-----

——インフレーションの国内面と対外面——

一 「インフレか円切上げか」……………	三〇四
---------------------	-----

二 インフレ規定分裂の根拠……………	三〇五
--------------------	-----

三 アメリカ・インフレの国際的性格……………	三〇九
------------------------	-----

四 インフレの国際的均等化と平価変更……………	三一三
-------------------------	-----

円切上げ後の日本経済

三八

——平価論争とふりかえりつつ——

一 円切上げ論の論拠と現実

三八

二 外貨累積の日本的メカニズム

三三

三 平価調整と日米の立場

三六

平価の多角的調整への視点

三二

インフレーションと国際通貨体制

三九

はしがき

三九

一金本位制

三四〇

二 金本位制の変貌

三四三

三 管理通貨制の成立

三四四

四 IMF体制——国際的管理通貨制度

三四五

五 ドル危機とアメリカの対応

三四七

六 スミソニアン多角的平価調整

三五三

七 アメリカの通貨改革構想

三五五

八 民間資本輸出と国際通貨構想

三五九

むすび

三六五

4 経済成長と金融構造

わが国金融構造と高度成長

一 はしがき

二 わが国金融構造の特質

三 これらの特質の資本蓄積に対する反作用と資本の政策

経済成長における金融政策

はしがき

一 貨幣・金融構造における金融政策の位置と成立地盤

二 貸付貨幣資本の形成と金融政策

三 現代資本主義の金融構造と経済成長における金融政策

むすび

解説（西村 閑也）

四二七

四一六

四〇九

四〇四

三九九

三九六

三九六

三七七

三六九

三六九

三六九

1

信用制度とインフレーション

序

本書は前著『資本と信用』（一九五四年）、『株式価格形成の理論』（一九六〇年）につづいて、主としてここ五年ほどの間に発表してきたもののうちから、とくに信用制度とインフレーション、物価問題に関するものを取りだして体系に付したものである。よみかえしてみると時間をへだてての統一がたがって未熟な点不満なところもあるが現在全部を書直す余裕がないのと、部分的な訂正ではかえって論文としての統一を損うことにもなるので、いまは誤植の訂正その他表現上体裁上の修正にとどめざるをえなかった。

いまこのようにしてふりかえってみると、その時々にはさほど意識せずにとりあげていたように思われても、その底流では筆者がいつも関心をもちつづけていたことは信用制度下のインフレーションの問題であつたとおもう。それは中央銀行の兌換が停止されている場合、財政の介入なしに市中銀行の信用創造だけでインフレーションがおこりうるか、おこりうるとすればその条件や限度は何か、また信用制度下のインフレの進行の態様はどういうものか。さらにこのうえに独占要因が加わった場合、独占価格だけからインフレがおこりうるか、おこりうるとすればその条件とメカニズムは何か。また先進国や後進国におけるさいきんの物価騰貴の原因や発現形態の特質、とくに新しくあらわれた消費者物価の騰貴と本来のインフレーションの異同と内的関連、相互移行の条件がある。また高度成長段階以前の漠然たる常識からみれば一義的にインフレの原因となつたオーバー・ローンのもとでインフレがおこらないこともある条件は何か。また株式市場の救済、運用預りの解約資金など資本市場の救済にむけられた資金が商品市場においてインフレを支えうるようになる条件は何か。さらにまた金融資産の累積、その流動化によるインフレをおさえようとしてうまれたラドクリフ報告や、金融媒介機関の比重の増大によつてうまれた中央銀行の金融政策の効果の低下に注目するガーリ

「ショー」説などにみられる金融政策のインフレ統制の限度は何か、等々。とくに現在のわが国では高度成長時の名残をひいた消費者物価の騰貴がまだつづきながら、しかも赤字公債の日銀引受発行さえ日程に上ってきているが、二つの物価騰貴の併存あるいは交替はどのような条件の下でどのような形であられるであろうか、注目に値する。

以下各章について主たる問題点とさいしょの発表機関、時期をあけておく。

第一章 ここでは資本が新しい需要部面として財政のほかにも消費者信用、サービス部門を開拓したこと、これによって従来からあった需要インフレ説、コスト・インフレ説は特殊な変容をうけ、物価騰貴自体も再生産過程にビルト・インされた自動運動的なまた成長インフレ的な外観をとるようになった根拠を究明しようとした。『経済評論』第九卷第八号、一九六〇年）

第二章 世界の各地域での物価騰貴現象のうち先進国のそれとは性質を異にする後進国のインフレを開発インフレとしてその原因、発現形態の特質をあきらかにしようとした。そして同じ後進地域のなかでも商品生産化、資本主義化、信用制度の発展・普及度の差異によって物価騰貴の波及・吸収の度合いにちがいがでてくることを検討した。『パンキング』一五二号、一九六〇年）

第三章 独占価格を維持しようとする力が流通上のどこかの地点で、銀行の信用創造、中央銀行の現金供給をひきだして、物価騰貴を波及させてゆくこと、さらにそれが企業自身のもつ金融資産の流動化という形をとって行なわれるときには、流通外からの通貨投入があたかも流通内部からの必要にもとづくような外観をとり、一見インフレーションでないような外観をとる。これは後進国におけるインフレの波及が商品化の低さのゆえに途中で吸収されるのと対蹠的である。また現在、固定費の増大による損益分岐点の上昇が操短を困難にし過剰生産物の押込み販売のために企業間信用を膨脹させ、これが銀行信用、現金通貨をひきだしているが、この固定費の内容が減価償却と金利負担であることを考えると、一定の利潤したがって一定の予定価格の固守が現金をひきだしているという点で本章の結論の一例といえよう。